



# 私の幼稚園

水島 さゆり

猫の巻

園長縁側で新聞を讀んでゐる。時雄傍の小さなちやぶ臺に寄つて、しきりに繪をかいてゐる。小春の陽にいつくしまれて、縁先のちつぽけな躑躅が、赤い蕾をちよこんくくと三つ出してゐる。

園長時雄の繪を覗いて見る。蓄音機ビクターの廣告―犬がレコードから出る妙音に感じ入つてゐる繪の敷寫が進行してゐる。犬の顔が薩摩芋のやう。園長をかしさを怵へて、眼を新聞に移す。

時雄「水島さん、犬はほんとに蓄音機が好き？」

園長「好きですとも、ほう此の犬だつて好きでたまらないから、こんなに聽いてゐるんです

よ。

時雄「ちや猫は？」

園長「猫？さあ、やつぱり好きでせうね。」

時雄「水島さん、あそこにトラ公が寝てゐるよ。」

鍵の手になつた三疊の板庇の上で、トラ公が暖い陽の光を占領して、紫外線を全身に浴び、心地よげに眠つてゐる。園長バンバンと手を拍つ。トラ公氣附かずに居る。園長大きく、「トラ公」と呼ぶ。トラ公頭を擡げてこちらを視る。

園長「時雄さん、トラ公に何か歌つて聽かせませう。」

時雄「蓄音機をやるといふね。」

園長「さうね、今蓄音機がないから、時雄さんの

歌がいのよ。」

時雄「うん、何がいの？」

園長「しやぼん玉がいでせう。」

時雄しやぼん玉を歌ひ出す。

しやぼん玉飛んだ、屋根まで飛んだ、屋根ま

で飛んで、こはれて消えた。風々吹くな、し

やぼん玉飛ばそ。」

トラ公頭を下げて眠つてしまふ。

時雄「だめだよ、ちつとも聴いてないんだもの。」

園長「ようし、ぢやあ水島さんが歌つてみやう

ね。」

園長軒先の物干竿の先で、板庇の裏をトントン

と軽くたたく。トラ公驚いて頭を上げる。園長お

もむろに、シユーベルトの子守唄を歌ひ出す。

ねむれー ねむれー

トラ公げんさうな顔をする。

屋根のうらへーにー

こゝまで歌つてトラ公の顔色に注意して見る。

トラ公ウフンと言つて、青天井を向いてしまふ。

これはいけない、今度はと、「からたちの花」を

歌ひ出す。

からたちの花が咲いたようー

とやつて見る。感じない様だ。

からたちの實は黄いろだよー

とやつたが、まだ感じない。一段と咽喉を柔くし

て、

からたちのそばで泣いたようー

とやると、大きな口を開け、八方へつん出た髭の

先を踊らせて、アツハハハハハと哄笑したやう

だ。

園長むつとする。ちやぶ臺の上に在る時雄の椿

の實を一つ採るや否や、トラ公目がけて投げつけ

た。ボンと板庇を打つて跳ね返つて来る。チエツ

今度は柄杓手洗鉢の水をすくつて、ざんぶとひつ

かける。水は日光にきらめき、拋物線を描いて屋根を濡らす。

トラ公不精無性立上つて、「お活潑ぢやて、わたしや若いんだがね、おめえ様だよ冷水に御用心は」とばかり、のそり／＼歩いて行く。園長くやしがる。

園長「トラ公はだめ／＼。もう絶交だ。」

書齋から友人名簿を持出して来て、

「北隣おきせ婆さん愛猫トラ公」

とある上へ、万年筆で太い棒を何本も引ばつてしまふ。

時雄「水島さん、どうする。」

園長「トラ公ともう遊ばないのよ。もう日向ぼつ

こさせてやらないの。」

時雄「なぜ？トラ公が困るぢやあないの？トラ公

は此の屋根が一番好きだから。」

園長「いけない／＼、トラ公はわるいから、今度

來たらバケツの水をぶつかけるのよ。」

時雄「可哀さうだね。」

園長硯箱と半紙を持出して来る。

オマへハ　ワタシノウタヲ　キカナイカラ

モウオトモダチデアアリマセン。

トラコウ

エンチャウ

と認める。時雄拾ひ讀をする。

園長「時雄さん、これトラ公に持つて行つて、讀

んでやつて下さい。」

時雄「いやだなあ、トラ公をいぢめるんだもの。」

園長「トラ公がいけないんですよ。さあ持つて行

つて、讀んでやつて。」

時雄「いや」

園長「ぢや此處へ貼出して置きませう。」

園長半紙を三疊の障子の表へ貼出して置く。

\* \* \* \* \*

園長「時雄さん、唯今。」

時雄「お歸りなさい。」

園長「面白い雑誌を借りて來ましたよ。讀むからいらつしやあい。」

時雄「ああん、いゝな、いゝな。」

園長のうちの茶の間、二人火鉢の側へ寄つて坐る。

園長「ね、動物と音楽つて言ふ所を讀みますよ。」

時雄「英語なんかわからないよ。」

園長「日本語に直して讀みますよ。さあ聽いてらつしやい。」

園長ほがらかな聲で讀出す。

此の間ニューヨークの動物園で、動物に音楽を聞かせました。六十何人もの大勢の人が樂隊をやつたのです。一番始めは、ツウステップと言ふ、踊を踊る時の樂隊でした。

此の大變な樂隊を、象も聽きました。ライオンも聽きました。狼も聽きました。虎も聽きました。熊も聽きました。皆さん、之等の猛獸が樂隊を聽いてどうしたと思ひますか。象と言ふ

と、あの長い鼻を、ぶらり／＼振つて、のつそ／＼と歩き廻りました。歩き廻つてゐるうちに、あのちいぢやいお眼々から、ポタリ／＼と涙を出しました。象クンは可愛いね。

今度はライオン。牡のライオンが二匹、どちらも肉の塊を食べかけてゐましたが、チララ、チララと大へん面白い樂隊が始まると、食べるのを止めてしまひました。そして、ぢいつと聽いてゐました。

狼と虎は、あまりいゝ音がするので、眼をつぶつてしまひました。そしていゝ心持になつてしまひました。

熊サンは後の足で立あがつて、ビヨコボン、チララ、ビヨコボン、チララと踊り出しました。樂隊が今度はシユトラスのワルツと言ふ、これも踊りを踊る時のをやり出しました。チララン、チラランと大層愉快な樂隊です。あまり氣持のよい樂隊を聞いたので、熊サンが眠つてしまひました。虎も眠つてしまひました。狼も眠つて

